

■シンポジウム趣旨説明

日本における「近代の歴史地理」研究の概観

山 根 拓

近代日本に関する地理学的研究が行われたのは、何ら新しいことではない。近代期の地理学者は同時代的に近代日本を研究してきたのだから。しかし、近過去の範囲から近代期を区別して、歴史地理学的な研究対象とするまでには、もう少し時間がかかった印象がある。

歴史地理学会では、1959年以来、前年の年次大会の共通課題の成果を『歴史地理学紀要』という形でまとめてきた。その中には創刊当初から近代化や明治期を扱う論考が見られたが、1964年には「産業革命期前後の歴史地理」(第6巻)、1966年には「明治後期の歴史地理」(第8巻)が特集テーマとして掲げられ、各々に関わる諸論考が収録されている。また、同時期に他の学会誌等¹⁾においても明治期を主とする近代期への注目が見られる。すなわち、今から約半世紀前に、既に日本近代/近代日本は、わが国の歴史地理学の研究対象とされていた。しかし、当時はまだ歴史地理学全体の中で近代への注目は大きなものではなく、「近代歴史地理学」が十分に成立し、学界で認知されていたとは言い難いと思われる。というのは、この当時の研究者たちにとって、明治期から昭和戦前期にかけてのいわゆる近代期は、未だ自らによって生きられた時代、すなわち「現代」として経験・記憶されており、それとの間に第二次大戦の敗戦という大きな社会的断絶を経てはいても、研究者自身が近代期を現代と区分された歴史的時代として捉えるには未だ時期尚早

な段階にあったのではないかとと思われる。

その後、戦後生まれの研究者が中心となり、本格的に歴史地理学・歴史地理学者が近代に注目するのは、1980年代以降のことと考えられる。ただし、この認識は1960年生まれの私の感覚を反映したものであり、当日の参加者の中でリアルタイムの経験を以て反論する方があれば、それについても議論したいと考えた。

歴史地理学会による1983年発行の『歴史地理学紀要』第25巻は、「近代の歴史地理」を共通論題とした論集²⁾である。今回のシンポジウムのテーマは「近代の歴史地理・再考」であり、これはわれわれオーガナイザーに対して歴史地理学会側から予め与えられたものであったが、この命名の趣意は1983年の論題、そしてその時期における当該分野の研究業績群を基点とし、それ以降に展開した近代の歴史地理学研究的業績を、過去と比較しつつ現時点で振り返り評価することを意識したものであろう。実際に、1980年代以降、近代の歴史地理学的研究への関心は高まり、斯学における研究の活発化と業績の蓄積が進んだ。それを反映し、1990年には『人文地理』の「学界展望」欄に歴史地理学分野の新項目として「歴史地理 近代」が加わった(42巻3号)。このことは、ここに至って近代の歴史地理学が一つの独立した研究領域として、地理学界や歴史地理学分野の内部で、その存在を明瞭に認知されたことを、示唆するものであろう。当欄の最初の執筆者である川口洋

は、「いわゆる近代は、国民国家・経済の形成、産業化・都市化社会への移行、世界経済への参入などを変革の主要側面として現代社会の基礎が形成された時代であり、これに伴う地域構造の解明こそ歴史地理学の主要課題と理解される」³⁾として、斯学の課題を提示した。これ以降、わが国の近代歴史地理学研究は豊富な業績を蓄積しており、毎年の学界展望欄の内容を参照すればその様子は自ずと明らかになる。そして、この展望記事も、昨年でついに開始以来20年を数えるに至った。ここ20～30年間の当該分野の研究の流れを見ると、1990年に川口が述べたような近代化による地域構造の変化に関わる研究も連綿として行われてきたが、国内外の地理学の内外において生じた諸々の変化（例えば文化論的転回やGISに代表される技術革新のような）の影響を受け、斯学の視角はさらに広がりを示し、近代歴史地理学の名の下に一層多種多様なアプローチが行われ、研究の多様化・豊富化が進展した。また、この間、日本地理学会「近代日本の地域形成研究グループ」のような近代歴史地理学に取り組む研究者集団が現れ、学会誌等へ寄稿・執筆する新しい世代の研究者たちが登場して、当該分野の研究は今のところ持続的発展が図られている。

本シンポジウムでは、当該分野研究の1980年代以降の新たな展開過程において、どのような研究テーマや対象、方法が出現し、それらがいかなる学問的成果をもたらし、他方でどのような研究上の課題や問題が新たに増えてきたかということについて、多方向的な議論を通じて考えてみたい。それによって、世紀を跨ぐ約30年の時間を経た「近代の歴史地理」研究のあり方を再考し、それに関する一定の評価を与えることができれば、この企画は相応の意義を持ち得るであろう。そして、この評価に基づいて、次代の近代歴史地理学／近代歴史地理学者がどのような方向性を目指し、何を克服しなければならないか、その

ためにいかなる研究上の実践が必要か、といった問題の設定が可能になるであろう。

このシンポジウムの構成について、次に紹介しておきたい。1980年代以降の「近代の歴史地理」研究が具体的にどのような見地から何を解明しようとしてきたのか、何が明らかになったのか、将来展望はどのように見定められるのかといった問題について話題を提供すべく、オーガナイザーである我々は6種のテーマを設定し、6名の実績ある研究者に報告をお願いした。報告者の多くは地理学者であるが、全てが歴史地理学のプロパーというわけではない。また、報告者の1名の専門分野は経済史学である。

ただし、報告者の何れもが、近代の歴史地理に関わる問題を自らの研究対象にしてきたことは紛れも無い事実である。また研究報告に対するコメンテーターについては、2名の報告について1名がコメントすることとし、3名の地理学者に依頼した。さらに、報告・コメントが終了した後は、総合討論に入る。ここでは討論の前に、限られた時間内で一定の討議が可能となるよう論点整理をする必要があり、総合コメントの時間を設けた。その後、1時間弱の質疑応答を行い、最後にオーガナイザーが、シンポジウム全体の総括を行うという進行を、目指した。

各報告の位置付けや狙いについて、以下に簡単に説明する。各研究者を特定領域と結び付けて単純にラベリングするつもりは全く無いが、6件の報告のうち先行する4件に関しては、歴史地理学者・空間科学的地理学者・社会地理学者・近代地図研究者という各々の立場にあって、自らの研究実績を振り返りながら、近代歴史地理に関わる研究の動向を紹介・批評・展望するよう、各報告者をお願いした。

①河野敬一報告「近代歴史地理研究の動向と課題—1980年代以降を中心として—」に対しては、歴史地理学者の視角から上述の「近

代の歴史地理」(『歴史地理学紀要』1983年)以後の研究動向と課題を、「近世から近代への視点移動、歴史地誌の研究、景観復原」といったキーワードを意識して解明するよう求めた。

②阿部和俊報告「近代日本の都市体系」は、計量革命や都市地理学の発展に影響を受け、それらを担った空間科学的地理学者の視点から、都市群システムのような現代空間の地域概念・分析ツールを用いて近代国家社会の構造を探った自身の研究の紹介を主とした内容となっている。「歴史地理的研究対象に対する空間科学的地理学の理論的応用・検証や都市地理学・経済地理学的視点・手法に関する問題」に注目した報告を期待した。

③大城直樹報告「場所の系譜学再考—あるいは風景の別の読み方について—」は、社会地理学者の視点から1983年時点ではわが国の近代歴史地理学研究では影の薄かった、社会理論・社会史的な視角の導入による解釈論的な実験や実践のその後の発展過程を紹介し、それがどのような新たな視角や成果を近代歴史地理にもたらしたのかについての検証を示すことを求められたものである。

続く④関戸明子報告「鳥瞰図にみる近代—草津温泉の事例を中心に」は、景観復原という歴史地理学のお家芸的な取り組みにおける新しい流れを踏まえたものである。とくに、鳥瞰図のような、20年前には近代史資料として正当に顧みられなかった素材=近代図像資料を利用・活用した研究の動向が把握され、その上で、「描かれた景観」の内容とその「作成主体」の分析を重視した新たな地図論的な取り組みが示された。さらに、自ら取り組んだ研究事例の検証を通じて、「近代の歴史地理」の課題や問題を考えることが意図されたようである。

以上の4報告および各2報告に対する2名のコメント(森川洋、中西僚太郎)を以て、午前中の日程は終了した。

午後の報告は2件であった。

⑤鷺崎俊太郎「歴史地理学—日本経済史間の学際的研究史：趨勢と課題」は、日本経済史学者である鷺崎自身の立場に依拠し、経済史とは研究対象を共有し多少は相互参照的な関係にもある近代歴史地理学の研究動向を、二人の中心人物の研究活動に注目してレビューする試みである。いわば異次元の視点から、歴史地理学に対する何らかの示唆や批判、提案等が出されれば有意義であると期待した。

最後の報告となった⑥米家泰作「『近代』概念の空間的含意をめぐって—モダン・ヒストリカル・ジオグラフィの視座と展望—」は、次代を担う若手の歴史地理学研究者による、当該分野に関する本質論的な考察として期待された。近代歴史地理学の鍵概念であるが、ともすれば時間的概念としてしか認識されない「近代」あるいは「モダンティ(近代性)」を、欧米のmodern historical geographyの研究動向に注目しながら地理的概念として見直し、つまりは歴史「地理」においてそれが本質的な概念であることを示そうとする試みである。近代歴史地理学がそこに立ち返ることによって、そこから新たな研究の展開を探ることが可能となろう。

この2発表に対して、矢ヶ崎典隆によるコメントが予定されている。また、6報告全体を受けての総合討論の最初に平岡昭利の総合コメントが用意されている。上述の通り、以降の討論における要点整理がここで出来ればと考えた。

総合討論の質疑応答では、それまでの報告・コメントを踏まえ、聴衆からの積極的な議論への参加も期待した。討論の後、オーガナイザーの三木理史が今回の総括を行い、本日のシンポジウムが全て終了する段取であった。

なお、上記6報告が、1980年代以降の近代歴史地理学研究のあらゆる部分をカバーしき

れているかといえば、必ずしもそうとは言い切れない構成となった。しかし、欠落した部分について、コメンテーターや参加者による補完や、議論の材料となることを期待した。いずれにせよ、議論が実質的になり、様々な見方・考え方の提示と相互比較が行われた結果、我々がこのテーマに対して一定の認識を共有することができるような、そうしたプロセスが確認され、そのことによって新しい近代歴史地理学の展開すべき道筋が我々の視界に開けてくれば幸いである。そして、このシンポジウムが多くの参加者にとって自身の研究を再定置するための、またとない機会となることを、オーガナイザーとして望みたい。

(富山大学)

〔注〕

- 1) 例えば、次のようなものがある。①人文地理編集部「昭和36年度大会シンポジウム 明治時代の地理」人文地理14-1, 1962, 72-98頁。②浅香幸雄編『日本の歴史地理』大明堂, 1966。③経済地理学年報編集部「経済地理学会第14回(1967年度)大会記事 シンポジウム「近代日本の地域形成」」経済地理学年報13-2, 1967, 48-57頁。
- 2) 歴史地理学会編『近代の歴史地理 歴史地理学紀要25』歴史地理学会, 1983, 235頁。
- 3) 川口 洋「歴史地理 近代(学界展望(1989年1月~12月))」人文地理42-3, 1990, 273-275頁。